

No.26 PH スタジオ 「ウォーターマーク（水標）」

PH Studio

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成8) 年 9月1日付 立川市市報記事より

PH スタジオが仕事をするときには、その場、地域を歩き、調べ、アーティストの目で何かを発見する。それが彼らチームの作品制作の出発になる。

ファーレ立川では、連結送水管のカバーを作ったのだが、彼らの目論見は、都市の中の大切なもの、水、電気、ガス等、人間のライフラインにかかわるものを祭ることにあつた。

ガスと電気については、いい場所がなかったのだが、水だけは神殿に入れられたわけだ。この水の家は、夜になれば灯りが入り、昼も夜も水の美しさを感じられるようになっている。

そういえば、以前彼らは、捨てられて顧みられない椅子を型を変えてリニューアルしていたことがある。それらの椅子も都市の中の重要な構成要素だったわけだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

美術の社会的機能というのがあるとすれば、日本において、それが実現しているケースはまれであろう。

時代をさかのぼれば私たちを感動させてくれる美術はたしかに存在する。だが現在進行形という意味においては、私達をわくわくさせてくれるものは少ないといわざるをえない。

さて、今回のプロジェクトは、美術が社会的に機能するかが問われるのではなく、社会的に機能しているものが、美術になりえるかどうか問われている。

「機能」はあらゆる難題を美術にもちかける。しかし日頃自分たちで何でも決めなければならない運命にある美術家にとって、それはある種の不条理なゲームに参加する喜びを与え、必要条件によって導きだされる、特殊解に快感を見だし始める。

これらの大いなる経験を通して、社会的に機能しているものは「より愛される機能」へと変身する。それは美術を街中に無防備で放り出してきたこれまでのやり方とは異なる、(美術が美術そのものとして機能しない)この国におけるひとつのリアリティーあるアプローチなのであろう。そして、さらにそれは「では本当の美術の社会的機能とは？」という問いかけを、 施主、美術家、建築家に逆照射しはじめるのである。

PH スタジオ チーフ 池田修